



第4回世界水フォーラムinMEXICO報告会が、4月22日にコープイン京都で行なわれた。

子ども特派員、左から

北川あゆさん 京都教育大学附属高校1年

松尾英将くん 京都教育大学附属高校2年

川端薫子さん 京都市立第四錦林小学校4年

東出一真くん 京都市立朱雀第四小学校5年

三谷英里さん 京都市立梅津中学校2年

第4回世界水フォーラム子ども特派員報告

子どもたちが見た 世界水フォーラム

NPO日本水フォーラム

<http://www.waterforum.jp/jpn/>

子どもと川とまちのフォーラム

<http://www.kodomo-mizu-machi.acrweb.com/>

世界水会議 WWC : World Water Council

<http://www.worldwatercouncil.org/>

第4回世界水フォーラムが、メキシコシティーで3月16日〜22日に開催された。前回は2003年（平成15）に京都で開催されたので、3年ぶりである。参加者数は1万9766名。日本からも皇太子徳仁親王殿下と橋本龍太郎元首相が参加し、皇太子が「江戸と水運」の基調講演を行ない、橋本元首相が議長をつとめる国連「水と衛生に関する諮問委員会」が行動計画を発表した。

これらオフィシャルな話は、世界水フォーラムの主催者である世界水会議のホームページに詳細が掲載されているので、そちらを参照されたい。日本語では、NPO日本水フォーラムも要約情報を提供している。こうした国際会議の広報文書は、外交文書と同じで、一言一句が意図を持って書かれていることが多いので、それを想像しながら読むのもなかなか楽しいものである。

さて第4回のテーマは「地球規模の課題のための地域行動」。もともと世界水フォーラムは、「さまざまなステークホルダーが参加して淡水利用について討議する世界最大の場」と自らうたっている。地域の現場で安全な淡水にアクセスできない人々が、地球上には14億人いるという現状は前回と変わっていないが、そこで最もしわ寄せ

を受けるステークホルダーが子ども、女性、低所得者である。しかし、彼らの声はなかなかこうした国際会議のテーブルに届かないという現実もある。

そこで本誌では、子ども特派員として世界水フォーラム取材に参加した「子どもと川とまちのフォーラム」の5名の子どもの目を通して会議の様子を伝えてみたい。

皇太子と話す

イギリス・テムズ川の舟運研究者であり、水問題にも深い関心を持つ皇太子は、前回の第3回世界水フォーラムの名譽総裁であり、今回も基調講演を行なった。

子ども特派員たちは、皇太子と在メキシコ日本大使館主催のレセプションで、言葉を交わした。会期中に子ども特派員が発行した新聞を見て「こういう文化を学ぶことは大切だから、頑張ってくださいね」と、一人ずつに声をかける皇太子の気さくな一面に触れたそう。

「時間が長くなって、橋本元首相から『そろそろ殿下を離してあげてください』と言われた。でも、私も『オランダの人に取材して、国ごとに助け合うことが大切だと言われました。国と国とを結ぶ絆

Forum for Children, Rivers, and Neighborhood Environment
250-10452, 2460-1
4th Floor, 2460-1
Tel: 81 75 717 3293
Fax: 81 75 717 3291
http://www.kodomo-mizu-machi.acrbw.com

For the Future Rivers

Kazuma Higashide (11 years old)

I interviewed Mr. Kyufumi Yoshino of the Japanese Water Resource Department, Ministry of Land, Infrastructure and Transport. He said, "Water is one of the most important resources necessary to make rivers clean," he replied that people should be returned to their daily lives. Used water must be returned to the ground to be returned to the ground. "Water is discharged routinely in our daily lives, and it is therefore important to discharge a lot of such water because in order to clean up such waters, the environment becomes polluted. That is why it is important that we try to use a lot of water. It is not enough to simply keep the environment around us clean. We must also think about other people."

It is true that it is also important that we continue with activities such as the ones addressed by FORNE. Individual effort will become a great moving power when undertaken by everyone.

At the FORNE, we must continue to consider...

左は子ども特派員が記事を編集した、A4、3頁「AQUA KIRARI NEWS」英語版。下がA3表裏の日本語版。現地では、チームに分かれ活動した。3号の新聞を発行した。



Photo by Aya Kitagawa (6 years old)

Start of My Activities

En Mitsun (14 years old)

A commemorative party in celebration of the opening of the 4th World Water Forum (WWF) was held by the Japanese Consulate on the 27th. There, I interviewed Shuichi Hoshino, the former Prime Minister of Japan, Ichiro Oda, the...

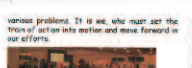


Photo by En Mitsun (14 years old)

Unity of Children and Adults

Water for the Future Generation

Vera Samsonova (16 years old)

Alexey Akber (15 years old)

At the seminar, I learned that the main objective of the session was to discuss the most important issues in water protection projects. I was very interested in the topic of water protection projects. I was very interested in the topic of water protection projects. I was very interested in the topic of water protection projects.

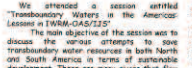


Photo by Alexey Akber (15 years old)

Don't Simply Contain Us! Let Us Have Fun!

Aya Kitagawa (16 years old)

I attended the session entitled "Adopting Integrated Flood Management with the IB" at the Biomax Center. The session was on flood control measures in entire river basins.

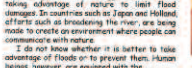


Photo by Aya Kitagawa (16 years old)

Holland Rivers Surrounded by Lots of Nature

Koanika Kawabata (10 years old)

I asked Ben from Holland, at the end of the session, whether there were any special efforts being made in the area of rivers that rivers can be made to be more habitable for fishes. According to him, there were no such rivers but if we needed to retain rivers in their natural state, we should plant lots of trees so that many animals can live there. He also said that there were fields and woods near the river, which...

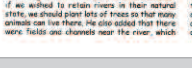


Photo by Koanika Kawabata (10 years old)

What I Learned at the Workshop Speaking in English

Hidemasa Matsuo (17 years old)

We held a workshop at the Olympic Center on the 27th. First, child correspondents from Kyoto and Hanu, Russia, discussed their natural activities in English. At the Q and A, many questions and answers were exchanged concerning our presentation. What was most memorable was the song sung by children from Egypt and the Republic of Togo. I was impressed by the fact that the people in those countries had been in use for so long years. I thought the fact that was in the program given to express their feelings about water through songs.



Photo by Hidemasa Matsuo (17 years old)

Leaders of various projects involved in environmental protection and protecting water resources took part in this session.

Rocio Arreaga (16 years old)

The Secretary-General of Amazon Cooperation Treaty Organization (ACTO) reported on the protection of the Amazon River. The main mission of this organization is to promote practical dialog among stakeholders, propose projects & regional programs that help make the use of water better. The main focus were Forests, biodiversity, and biotechnology.

USA

We are in perfect agreement with the opinion of these people but we would also like to point out that it is important to not only take water protection but also to open our minds to ecological mind to change the ecological mind-set of people. It is important to realize ecological communication projects for children. Change in children's mindset also influences that of adults such as their parents and teachers.

自然のいっけいのオランダ川

英語を聴いてのワークショップで学んだこと

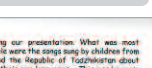


Photo by Hidemasa Matsuo (17 years old)



世界水会議・プログラムディレクターのポール・ファン・ホフウェーゲンさんに質問。「日本のカップをご存知ですか？」下の写真は彼を囲んで。



プレスルームで記事を書いているときに、配った新聞を見て大人の記者が訪ねてきた。大人とか子どもと関係なく、記事の内容を話してくれる人が海外には多いようだ。

このページの写真提供：子どもと川とまちのフォーラム



世界水会議・プログラムディレクターのポール・ファン・ホフウェーゲンさんに質問。「日本のカップをご存知ですか？」下の写真は彼を囲んで。



プレスルームで記事を書いているときに、配った新聞を見て大人の記者が訪ねてきた。大人とか子どもと関係なく、記事の内容を話してくれる人が海外には多いようだ。



プレスルームで記事を書いているときに、配った新聞を見て大人の記者が訪ねてきた。大人とか子どもと関係なく、記事の内容を話してくれる人が海外には多いようだ。

このページの写真提供：子どもと川とまちのフォーラム

も必要と思いました」と話したら、うなづいてくれました」と、三谷英里さんはうれしそうに語ってくれた。

日本では難しいこうした触れ合いが、国際会議では少し立場を離れて子どもたちと水問題の意見交換ができたという、微笑ましいエピソードだろう。

「子どもなのによく取材できるね、という大人も多いんだけど、海外の人は、子どもだからといって馬鹿にしないでちゃんと答えてくれた気がする」と北川あゆさんは話してくれた。

「統合的水資源管理における統合的洪水管理の適用」という分科会に参加した特派員もいる。洪水対策の必要性や、地方政府に基づいた地方計画などさまざまな議論がかわされたというが、特派員の記憶に残ったのは、質疑応答でのエジプト人参加者の言葉だった。

「あなたがたは、洪水をいつも治めてしまおう。けれど、溢れさせて、台地に恵みを与えるようにポジティブに考えたらどうか。昔のエジプトはそうだった」と。

松尾英将君は、そのことを伝える記事の中でこう書いている。「目の前まで水の大切さについての議論がされていたとき、自分も皆に伝えたいことが数多くあった。」

「よく話し合って、水問題の解決法

壁を越える勇気

必要と思いました」と話したら、うなづいてくれました」と、三谷英里さんはうれしそうに語ってくれた。

日本では難しいこうした触れ合いが、国際会議では少し立場を離れて子どもたちと水問題の意見交換ができたという、微笑ましいエピソードだろう。

「子どもなのによく取材できるね、という大人も多いんだけど、海外の人は、子どもだからといって馬鹿にしないでちゃんと答えてくれた気がする」と北川あゆさんは話してくれた。

「統合的水資源管理における統合的洪水管理の適用」という分科会に参加した特派員もいる。洪水対策の必要性や、地方政府に基づいた地方計画などさまざまな議論がかわされたというが、特派員の記憶に残ったのは、質疑応答でのエジプト人参加者の言葉だった。

「あなたがたは、洪水をいつも治めてしまおう。けれど、溢れさせて、台地に恵みを与えるようにポジティブに考えたらどうか。昔のエジプトはそうだった」と。

松尾英将君は、そのことを伝える記事の中でこう書いている。「目の前まで水の大切さについての議論がされていたとき、自分も皆に伝えたいことが数多くあった。」

それが言葉の壁と発言する勇氣のなさによって遮られてしまったのは残念なことだ。今回のワークショップを通して、英語をはじめ、異国の言葉を学ぶことと、勇氣を持って発言することの大切さを改めて実感できた気がする」

川端薫子さんは、そんな言葉の壁をもつとしないで井手慎司さん（子どもと川とまちのフォーラム副代表）の通訳のもと、果敢にインタビュースたようだ。

「分科会が終わってから、オランダのペンさんに『魚が棲めるような堤防をつくるための工夫はありますか』と聞きました。『そのような堤防はないけれど、自然を残したい川の周りには木を一杯植えて、動物たちがすみやすいようにしている』と教えてくれました。これからも一杯取材して、いろいろなことを知りたいです」と話してくれた。

国際会議には言葉だけではなく、いろいろな壁が存在する。例えば、分科会のコーディネーターも、宣言をとりまとめる強力な権限を持つて壁になることもある。討議の場に来ていない当事者が多数いるということも、一つの壁といえるかもしれない。しかし、暫定的であつても宣言を取りまとめていかないとアクションは動かない。そんな対話の現場で、国を代表する

ような参加者も、今後どのような勇氣を育んでいくのか、大きな問題を提起されている気がする。

海外から日本を見ると

会議運営のやり方にしても、お国柄や価値観が反映している場合が多い。秒刻みで進んでいく日本時間と違って、メキシコでは時間がずつとノンビリ進んだということもあるだろう。こうした価値観、文化の違いが、水にかかわるさまざまな問題の根っこにある。子ども特派員は、身をもってその根の深さを学んだに違いない。ロシアとインドネシアからの子どもたちを同行させようという試みも、アクションに拍車をかけ



ることになった。ロシアからの参加者は1日遅れて、インドネシアからの参加者はビザの問題で結局入国することがかなわなかった。事前の情報の少なさ、現地での大会運営の不手際は、慣れない外国で子どもたちにさぞかしプレッシャーを与えたことだろう。しかし、子ども特派員はたくましくその困難をかいぐり、見るべきもの、感じるべきものをちゃんと経験して帰ってきたようだ。



日本での報告会に引き続き、「川とまちの寄り合い車座会議」にも出席。難しそうに腕を組み琵琶湖博物館館長川那部浩哉さんの隣でメモを取る特派員。「子どもと川とまちのフォーラム」の事務所は京都市内の町家にある。翌日、メキシコに同行された事務局の小丸和恵さん（左）にも同席いただいて、北川あゆさんと三谷英里さんに話をうかがった。

「ブースも立派なところと簡単に済ませているところの差があった。でも日本のブースだけが、ものすごく明るいのは目立っていた。田圃のきれいな写真が並んでいたけれど、外国の人が見てどうなかなあ、と思った」

「日本はルールをちゃんと守れる、という点では誇れると思う。恥ずかしいところもあると思うけれど」というような言葉が、特派員か

ローカルアクションの当事者に参加してほしい

特派員たちは、会議の取材後、近郊のチャバラ湖まで足を延ばし、メキシコの子どもたちと先住民の儀式を体験したり、水質調査をしたという。「母なる大地」という概念に基づいて、常に自然を敬ってきたウイチヨール族と出会い、「私たちにとって自然とは何だろうか」というテーマを持った特派員もいる。

世界の水指導者が集まった国際会議と、地元の水文化体験。このいわば対極の世界に触れ、特派員は第4回世界水フォーラムをどのように評価したのだろうか。

「今回の会議のテーマがグローバルチャレンジのためのローカルアクション。でも、その割にはローカルな人が少なかった気がする。地元の漁師さんや、本当に直接水に関係のある人が参加すればよいのに」

このつばやきを、われわれ水に携わる者は「子どもの言葉」と流さないことが求められているのかもしれない。

